

若手の心得

濱 真司



政治や社会の動きに無関係ではなく、研究者を取り巻く環境も厳しい面が多いと察します。真面目に実験スキルを習得する方もいれば、ひたすら世を憐む方もいるかもしれません。そんな現代の学生・若手研究者の参考になるようなメッセージを提供する、このコーナーは大変面白いと思います。研究の進め方や技術的な背景については、本誌のさまざまなコーナーで有益な情報が載せられています。貴重な紙面を使用するせっかくの機会を頂きましたので、ここでは大学院などで一定の専門性を得た後に環境を変えて頑張ろうとする学生・若手研究者を対象に、心得のようなものを著者の体験を交えて紹介したいと思います。

「楽しむ」ことの強みと効果

筆者は2006年に大学院博士課程を修了後、同年に現会社に就職し、バイオマスのエネルギー化に係る研究開発でベンチプラントの運転や操作条件の検討などに携わっております。大学時代の専攻は化学工学ですが、それまで身に付けた(と思い込んでいる)専門性と会社で求められる実務能力の間に大きなギャップを感じたことは事実です。実際のところ、学位を取得するためには学術的に新規な発見を複数の論文にまとめなければなりません。そのため、生物を扱うラボにいた私の学位論文は、プロテオミクスで遺伝子やタンパク質を検出したり、蛍光顕微鏡でタンパク質の挙動を調べたりすることが主な内容でした。これまで手の中に納まるスケールの実験対象ばかり扱っていた人間が、いきなり何メートルもあるステンレスのタンクや配管と格闘することになった訳です。当然、技術不足からミスを引き起こすことも多く、配管の抜け落ちで原料の油を頭から被ったときには、自分でも説明できない意味不明な笑いと涙が出てきたことを記憶しております。

このような状況で、知識・技術ともに未熟な私達若手研究者は如何にすべきでしょうか？ 少なくとも私達は、狭い専門分野の枠に固執したり卑屈になったりすることのないよう努めねばなりません。それにも拘らず、一般に博士課程修了者に対する風当たりが強いように思えるのは、過去の専門性と共に守旧性などの贅肉を身に付けてしまっているからかもしれません。ただ、研究成果の実用化が強く求められる現代、たとえば生物の一専門分野をたかだか数年で習得した(つもりになる)くらいで即大きな貢献に繋がるかどうかは、皆さんであれば分かるはずです。周囲のニーズに応えようとすればするほど、いずれはきっと、未体験の分野へ飛び込む必要に

迫られるでしょう。なぜなら基本的に研究者の使命は、過去の解決された課題ではなく未知・未解決の課題に取り組むことだからです。そのとき、つまらないプライドや主義に左右されて自分自身の専門知識の限界から目を背ければ、せっかくの成長のチャンスを逃しかねません。

未知の状況に置かれたとき私が心がけているのは、目の前の状況を「楽しむ」ことです。未知あるいは苦手な領域では、容赦なく批判されるでしょう。叩かれることでしょう。そのような中でも、価値観の違い、理不尽な状況、格好悪い自分etc., すべてひっくるめて楽しんでしまうのです。楽しめるほど仕事は甘くないと思う方もいるかもしれません。しかしながら、従来と同じ楽な仕事を怠惰に続けることと、価値観の相違や物事の本質に気づき楽しみを覚えながら仕事をするの間には、決定的な違いがあります。楽しむことは未知な状況を乗り越える大きな力になります。

皆さんが目の前の仕事を楽しみ充実感を覚えることができたとき、ぜひ周囲を見渡してみてください。どういうわけか、あなたの周りに味方(少なくともそう思える)が増えているはずです。楽しむことは自然に素直で利他的な行動へと繋がり、それによって周囲を良い意味で巻き込む効果も有していると思うのです。

楽しむための原動力

それでは、楽しむための原動力はどこから生じるのでしょうか？ 私自身も明確な答えはまだ見つかりませんが、キーワードは「自責と他責」ではないかと思います。ここで自責とは原因や責任の所在を自分自身に置くこと、他責とは他人や環境のせいにするを指します。あまり自責の念に囚われるのも問題ですが、他責思考の特に恐ろしいところは、今直面している課題を自ら取り組むべきものと認識しなくなる、また最終的にはその課題すらも見えなくしてしまう点です。楽しむための原動力は、少なくとも自責思考を源泉とするのであって、他責の念からは決して生まれません。

仕事柄、ありがたいことにさまざまな先輩方と接する機会を頂きますが、活躍されている方の多くは仕事も人生も楽しんでいらっしゃると感じます。私達が先輩方を見習って一体どこまでやれるのか分かりませんし、成功の保証もありません。ただ、まだまだ未熟な若手のうちは「成功」を焦るよりも「成長」を楽しみながら頑張りたい、これが私なりの心得です。皆さんはいかがですか？